

2020 年度 第 10 回講演会 記録

日 時	2021 年 2 月 27 日(土) 13 : 00~16 : 00		
会 場	住田町からのリモート講演を ZOOM 中継し、オンライン配信		
講 師	ふるさと創生大学運営委員 藤井洋治先生	来賓	京都大学名誉教授 池上 惇先生
演 題	ふるさと創生：遠野市・住田町からの発信		
備 考	受講者 152 名	記録	飯田正恒

はじめに

【田中 克 先生】

皆さん今日は。今日は黒姫山麓の森の中の山荘から参加します。付近には雪が 1.2 m ほど積もっていますが、晴れていると春の兆が感じられるようになってきました。藤井洋治先生にお世話になった 2018 年 9 月の遠野市・住田町の自然観察会は大変に印象深いものでした。本日のレジュメを拝見すると、観察会で私達が観たのはほんの上っ面であったことに気付かされました。2018 年 5 月に住田町に「ふるさと創生大学」が開校されて以来今日まで多くの経験を積まれたことと思います。今日は最新のお話も含めてお聞きし、勉強し直したいと思っています。

藤井先生のお話のなかで印象深かったのは、先生は小学生時代、「遊びながら学んだ。宿題をした覚えはない」(笑い)ということでした。今の時代、子供を取り巻く環境はその逆のように思われます。本来あるべき教育のかたちに先生のご経験を重ね合わせてのお話をしていたければありがたいです。

池上先生は、自然資本を賢く循環的に利用するには、まず「人」だと説かれています。住田町はまさにその方がたくさんおられるモデルの町であるように思います。

時代とともに四季折々の暮らしが次第に失われて、大切な「ふるさと」との繋がりを問われているときに、住田町では 40 cm はあろうかというイワナを親子が捕まえる、このようなことができる素晴らしい環境に恵まれた町で、いろいろな体験を積み重ね、「学び合い」、「育ち合い」ながら人の意識を変えていく、そのような根源的なお話しを楽しみにしております。

【池上 惇先生】

田中先生には常々お世話になっており、2018 年に自然観察会で遠野市・住田町においていただいたときも、現地で直接に森里海連環の重要性を教えていただきました。住田町は、縄文の里として知られるところです。縄文人は絶えず山と海を往復しながらの暮らしが 1 万年も続いたのですが、なぜそれが可能であったかを考えて見ますと、山里海が一体になった生活環境であったからこそ、自然と人が共に生きてこれたのではないのでしょうか。生存競争の激しい現代の世に、自然と共に生きられる、人と人が共に生きられる、このような世界をいかにして創るか、この課題に我々は直面しています。東日本大震災の復興に住田町はボランティアの宿舎に町の体育館を提供し、大学生たちは陸前高田市など沿岸部の被災地に通いました。藤井先生はボランティアのボランティアとして、彼らの滞在中の生活支援をはじめ、農作業体験、道路整備や桜の植樹など、ボランティアの学生達と一緒に汗を流されていました。

一人ひとりの自立を認め合い、尊敬し合いながら共に協力し合い、さまざまな活動を支え合いよい結果を生み出していく。これは簡単には出来ないことで、この具体的な事例を全国で発掘しており、奄美大島での事例が本になりました。藤井先生に仲介をしていただき、岩手と奄美で体験を共有し合う計画が進ん



池上 惇先生

しております。地域づくりに多くの人の力を集めることは容易ではありませんが、実際にやり始めてみると実現をめざして頑張る人が現れ、要は「本気でやれば出来る」ことを実感しています。

かつて釜石市の日本製鉄(株)で多くの住田町民が従業員として勤務してきました。住田町で農業をしながら製鉄所でも働き、町を支える力になってきました。藤井先生は校長として学校運営をしながら、一方では農業者としても頑張り、日本一とも思える農業の名手です。米をはじめ、様々な農産物を生産されており、どれもおいしいです。藤井先生が町を歩いていると向こうから人が寄ってきて、先生何かいい話はありませんかと聞くのですね。先生は農作物づくりにいろいろと工夫を凝らし、よいものができる地域の人びとに公開し、生産農家としても、地域の活性化に大いに貢献されています。藤井先生は住田町にとって本当に力強い、頼もしい存在です。

【藤井洋治先生】

田中先生、池上先生から過分な紹介をいただき、大分緊張しております。教員時代の悪い癖で、話が脱線してどこへ行くか心配しておりますが、しばらくの間お付き合いください。

2018年に自然観察会で遠野市、住田町にお出でになりましたが、私はその時、別の用事があり充分にご案内が出来ませんでした。本日は少しでもこの時の挽回が出来ればと思っております。

本日、私は岩手県住田町にある五葉地区公民館からお話しています。以前この場所に、小学と中学が一緒の学校があり、私もこの学校で学びました。その当時次第に生徒数が少なくなって廃校となり、校舎を公民館に転用することになりました。私が学んでいた当時、生徒数は小中合わせ 200 人ほどいましたが次第に少なくなり、ついに閉校になりました。

私の高校教員としての最後の勤務地は遠野市でした。高校は遠野市に通学、遠野市は私の第二のふるさとです。教員を終えるとき、早池峰山の麓にある廃校になった大出小中学校を、地域社会の未来を拓く「遠野早池峰ふるさと学校」にリニューアル、遠野市から地域活性化アドバイザーを委嘱され、運営に携わることになりました。この施設は岩手県で 2 番目に高い早池峰山(標高 1914m。1200 年の社歴がある早池峰神社がある。次ページ写真参照)の麓にあります。今日のお話しはここから始めます。



藤井 洋治先生

【講演要旨】

I. 遠野市からの発信

1. 廃校を利用した遠野早池峰ふるさと学校

遠野市は盛岡市のやや南内陸部に位置し、自宅のある住田町からは車で約 30 分かかります。遠野市の北には早池峰山があり、遠野早池峰ふるさと学校はその麓の大出(おおいで)にあります。

遠野市の概況

- ・人口 25,200 人、
- ・総面積 826 km²
- ・人口密度 31 人/km²
- ・柳田國男の『遠野物語』の舞台
- ・平均最高気温 14.5℃
- ・平均最低気温 4.7℃
- ・猿か石川が北上川に注ぐ
- ・早池峰山標高 1,917m
- ・市の木 いちい
- ・市の花 やまゆり
- ・市の鳥 やまどり



早池峰山 (標高 1917m)



早池峰神社

遠野市は内陸部にあつて冬場は寒く、早池峰ふるさと学校の最低気温は1月末にはマイナス 20℃にもなります。旧大出小・中学校の生徒数は最も多い時には 85 人いましたが次第に減少し、今から 15 年前には僅か 3 名になり閉校しました。閉校後の校舎活用について遠野市と地元住民が協議し、都市と農村を結ぶ拠点「遠野早池峰ふるさと学校」として再出発することになり、私は職員として 6 年間運営を担当しました。その 2 年目に東日本大震災に遭遇し、遠野市内で被災地の復興支援活動に携わりました。

なお、このふるさと学校は遠野市と友好都市の大府市（愛知県）、武蔵野市（東京都）の支援を受け「大府市ふるさと学校」、「武蔵野市ふるさと学校」として 3 市が共同利用しています。

(1) 遠野早池峰ふるさと学校での活動

学校開園 2 年目に東日本大震災に遭遇し学校来校者は途絶えたものの、しばらくすると遠野市を訪れた震災ボランティアが休憩施設として利用し始め、学校の静けさや古風な神社がロコミで広がり、徐々に客足が伸び食堂の利用者も増えてきました。

(当時の様子はレジュメ p2「2. 遠野早池峰ふるさと学校」の項に記載してありますので参照下さい)。

(2) 遠野緑峰高校生が発見し、商品化した「早池峰菜」

遠野緑峰高校の生徒たちは、ふるさと学校産直の魅力的な商品として、遠野地方早池峰山麓の農家で「莖立菜」の名で栽培されていたアブラナ科の野菜に注目しました。しかし当時栽培する人はいなく、村の古老に尋ねても知る人はいませんでした。種子を入手し学校の畑で農家の協力を得て栽培

を始めました。商品名を「早池峰菜」と名付け、ふるさと学校産直で販売する一方、避難所の方々にもプレゼントしました。遠野の名産品になるようにPR活動も行っています。早池峰菜は低温期の生育が抜群によく、夏に種まきすると冬から春先にかけて収穫できます。丸葉で肉質は柔かく漬物、煮物など利用範囲が広いです。現在、種子は種苗会社で販売するようになりました。



早池峰菜

(3) 遠野早池峰ふるさと学校の対外的活動(主なもの)

以下の実施例を写真で紹介されました。

- ① 板張り廊下 (35m) の雑巾がけ競争。小学生に大人気です。(レジュメ p.2)
- ② 雪合戦：冬季早池峰の 1m を超える降雪を利用、国際雪合戦大会を実施しています。(同・p.2)
- ③ 絆の演芸会：ふるさと学校で毎年行う演芸会に東日本大震災の被災者も交え、「絆」の文字を加えた「絆の演芸会」。伝統の踊りや行事などをお互いに披露し合います。(同・p.2)
- ④ 小学生の利用：あいにくの雨天のとき等、学校講堂 (畳敷) を解放し利用してもらっています。子どもたちに、禁止規則や叱る人のいないところで伸びやかに遊んでもらい、したいことを自由にやらしてもらおう考えで接しています。
- ⑤ 地元・遠野緑峰高校の生徒たち：地元学研修で来訪。大学生たちの利用もあります。
- ⑥ 福島県・柳川小学校の子ども達を招待し、放射能汚染の心配なしに思い切り遊んでももらいました。また、福島の放射能汚染への心配を次のように話しました。一日も早く、福島の放射能汚染がなくなることを切に願う一日になりました。

福島の放射能汚染

いままで産直で多く販売していたキノコが全く売れなくなりました。山菜など山でとれるものが食べれなくなりました。そのわけは原発事故の放射能で山も汚染されたからです。原子力発電所に近いところだけでなく、そこからかなり遠い山の中まで放射能で汚染されているのです。町だけでなく、福島県全体が放射能で汚れてしまったことがとてもショックでした。

年間来場者 5 千名を越えた

いままで校庭に大型バスが入ることはありませんでしたが、震災後 3, 4 年が経過し、訪問者が増えました。学校施設の利用や活動が拡大多様化したことから、全国紙が注目し「廃校 新たな活路」として報道されると、来場者が全国に及び、開校 4 年目には年間来場者が 5 千名を越えるようになりました。

(4) ユネスコ ESD 活動

私は遠野ユネスコ協会に加入し、環境を含めた ESD (Education for Sustainable Development の略で「持続可能な開発のための教育」) を小学校、中学校に出前授業しています。環境教育として、中学校の場合は主に水、ゴミ、あるいは川と海のつながりの問題などを説明します。食べ物、地球環境、また海外の問題も取り上げます。遠野中学校 3 年生 128 名を対象の ESD で、フィリピン、エクアドルのバナナ農場で働く子供たちの現状をレクチャーしました。

(この出前授業を遠野市の TONO TV が報道。その録画ビデオを視聴した。要旨以下のとおり)

出前授業の概要 (TOYO TV 番組キャスターの説明採録)

世界には環境、人権、貧困、平和などの地球規模での課題が数多くあるといわれます。この出前授業では、地球規模の課題を自らの問題として捉え、一人ひとりが自分にできることを考えながら実践していく力を育んでもらおうと遠野ユネスコ協会が一昨年から市内の小中学校で行っているもので、この日は遠野ユネスコ協会の藤井洋治さんが講師を務め、フィリピン、エクアドルのバナナ農場で働く子供たちの問題について説明されました。中でも、賃金について岩手県の最低賃金738円(平成29年10月1日発効)に対し、フィリピンでは一日500円以下、エクアドルでは一日50円であり、世界に目を向けると賃金の格差が広がっていることを問題提起されました。

さらに授業ではバナナ農場での作業を体験してもらうため、両端に重量物をぶら下げ、肩に担いで運搬する天秤棒が用意され、3人の生徒が実際に担いでみて、現地の子ども達の大変さを体感していました。このESD出前授業により、生徒たちは今自分たちにできることは何か気づきを得たようです。

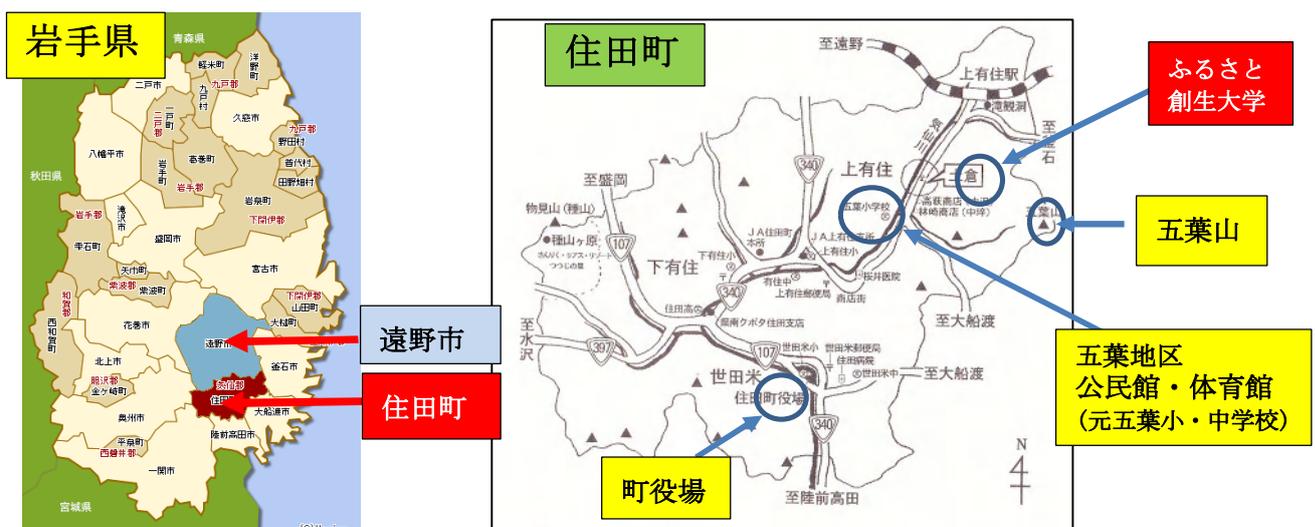
環境の問題は、私達の身近な生活を始めいろいろなことが全て環境に繋がっていることや、世界の全ての人々が一つの地球に住んでいる限り、日本から遠い外国のことであっても、関心をもつことの大切さを説いてきました。川の水や水道水などの水質に関心を持ち、いろいろなことを調べて発表したり学習している学校があり、とてもうれしく思っています。

II. 住田町からの発信

住田町は遠野市の南にあり、陸前高田市、大船渡市、釜石市の沿岸都市に囲まれた町で、海に面してはいませんが岩手県では沿岸部地域ということになっており、半分沿岸部、半分内陸気候の地域です。東日本大震災以降、住田町と震災被災地を結ぶバスの運行回数が非常に多くなりました。住田町は上記のどの町へも近く、津波の心配のないので、ボランティアの宿泊地に選ばれたのです。

住田町概況

人口5200人、人口密度18人/㎢、総面積335㎢、種山が原 宮澤賢治『風の又三郎』の舞台
 平均最高気温15.6℃、平均最低気温5.9℃、気仙川が陸前高田市広田湾に注ぐ 44km
 五葉山標高1341m、町の木 スギ、町の花 アツモリソウ まちの鳥 ヤマドリ



○住田町の気候

気温は沿岸部の陸前高田市や大船渡市、釜石市に隣接する地域と、内陸部の遠野市に隣接する地域では気候にはかなり大きな違いがあります。

○五葉地区公民館・体育館

五葉地区の活動の拠点です。体育館には 300 名近くの震災ボランティアが宿泊施設に利用。ここを拠点に陸前高田市、大船渡市、釜石市、大槌町にボランティアに通いました。(写真 レジюме p.3)

1. 住民と学生ボランティアの交流

学生ボランティアと住民との交流の様子を写真で説明されました。

- ① 被災地の復興に多大な貢献をしてくれた学生ボランティアたちと住民との交流会を公民館多目的ホールなどで行ない、感謝の意を表しました。
- ② 学生たちは震災ボランティアとしての活動に止まらず、宿泊でお世話になっているこの町の子どもの役に立ちたいと、子どもたちと遊んだり、学習指導や食事を共にしました。
- ③ 懇親会場を涼しい川辺に床を設けるなど工夫した結果はボランティアにも住民にも好評でした。
(写真 レジюме p.3)
- ④ 町民からの郷土料理提供、地元のお母さん達の手ほどきで郷土料理を作りました。
- ⑤ 京都精華大学ボランティアとの交流会の後日、お礼にと彼らが主催する懇親会に招かれました。
- ⑥ 自治公民館や体育館での敬老会に参加し出演するなど、折々に交流が生まれました。
- ⑦ 八日町の祭りにも参加し、祭りを盛り上げてくれました。
- ⑧ いざというときのサバイバルの方法を学生たちに伝授しました。

住田食材研究会というグループの指導で、新聞紙を薪の代わりにの燃料にすること、生きたニワトリ 2羽を調理することなどを住民の指導で体験してもらいました。学生達はニワトリをさばいたり、調理は生まれて初めての経験で最初は驚いていましたが、この体験を大変喜んでくれました。

2. ふるさと創生への道

震災を機に、いわて GINGA-NET が全国から学生ボランティアを、住田町の五葉地区公民館で受け入れ、その人数は累計 1 万 7 千人にもなり、この町に大学のキャンパスが出来たような錯覚を覚えました。ここに大学をつくるとすればどんな大学ができるだろうか。こんなことを夢想しているとき、京都大学名誉教授・池上淳先生は、この人の移動を震災からの学びの場に転換し、地域住民とボランティア学生の貴重な「学び合い」が進む地域とし、互いが主体的に積極的に教育や学習に参加し合う地域にすることを示されました。

3. 「ふるさと創生大学」の始まり

2018 年 5 月 3 日、五葉地区公民館で「ふるさと創生大学」の開校式を行い、2019 年 2 月 7 日、土倉地区の古民家を改修した学舎が誕生しました。(学舎写真レジюме p.5)

上記 2、3 項はレジюме p.4~5 に詳細な説明があるので参照下さい。本記録への記載は省きます。

【コーヒーブレイク】

4. 町民手作り番組 「ねんぷにやっぺし」

「ねんぷにやっぺし」とは、この地方の言葉で「ゆっくりやりましょう」と言う意味です。

(番組の概要)

- ① ふるさと創生大学 学長 池上 淳先生 ご挨拶

地域の皆さんが学び合い、育ち合い、語り合う場として、自分の可能性を発見し挑戦する決意の

もと、ふるさと創生大学が大きく育つことを願っています。と挨拶されました。

- ② 「この道」 斉唱 作詞・千葉修悦 作曲 佐々木祐一
- ③ 学舎の説明：学舎として改装の基本的な考え方など
- ④ 神社参拝：往復の道すがら池上先生と参加者が対話（「哲学」、「学ぶ」、「努力」ということ等）

5. ふるさと創生大学「学び合い育ちあい」実例紹介

コロナ禍のため活動に制約を受けながらも行った学習活動を写真で紹介されました。

- ① 大船渡市、陸前高田市、住田町は、昔は気仙郡という一つのエリアで、伊達藩の所領でした。食べ物も共通性があります。このような歴史背景があり、大船渡市で「川、海に繋がる食べ物」をテーマに勉強会実施。藤井先生は農作物の食文化を説明し、大船渡市の漁師が海産物を紹介しました。
- ② 「里山を守る会」の会員が里山の現状と今後の課題を解説しました。
- ③ 五葉小学校元校長が文化資本について講演しました。
- ④ 藤井先生自宅納屋を「研究棟」に改造し、岩手県立大学学生がフィールド・ワークに利用しました。
- ⑤ ふるさと創生大学が借りている田圃で、小学生から年寄りまで参加しての稲刈り体験。
- ⑥ 気仙川上流の田んぼ(藤井先生所有)で岩手県立大学の学生が稲刈り体験。 他

6. 源流の光景

① メープルシロップ

五葉山からの川の流れは集落の水源地です。もう一本の川は大祝沢から流れてくる川で、昔は金が採れ、大いにお祝いしたことからこの地名がついたといわれます。

川岸にはイタヤカエデが自生し、樹液は甘いメープルシロップになります。今が最適期で、昨日も採取の仕掛けをしてきたところです。メープルシロップの利用方法を食材研究会が開発中です。

② 子供たちにして欲しい川遊び

昔、川で遊ぶことは子供の楽しみでしたが、最近は川での事故もあり、危険視されるようになりました。親も心配しますし、学校も川遊びを勧めることはせず、するならあくまでも自己責任とか、親の責任でと言い、私は非常に残念に思っています。遊びながら身近に豊かな自然があることを感じ取ってほしいと思うのです。(写真：レジュメ p.6 「大イワナのいる気仙川源流の地で川遊び」)

③ 住田町の花 アツモリソウ (ラン科)

住田町にはアツモリソウが自生していましたが、現在絶滅危惧種に指定され、原種はほとんど見かけることができなくなりました。私が子供のころ遊んだ山には多くみかけました。何とか昔のように復元はできないものだろうか、と思案しているところです。

7. 農産物の産直

ふるさと創生大学は農家から田んぼ 10 アール、畑 15 アールを借りて野菜を栽培し、収穫したコメや野菜を地元農家の農産物と共に産直で販売することにしました。地元の農家からの要請もあり「えんがわ産直」と名付け、ふるさと創生大学と協働で、学舎の「えんがわ」で販売しています。

写真右 アツモリソウ (ラン科)

左 えんがわ産直の光景



“住田町ホットライン：ふるさと創生大学『えんがわ産直』オープン” 報道を採録

えんがわ産直は、新鮮な野菜を多くの人に届けたい、誰もが気軽に集まれる交流の場を作りたいと、住田町の文化や地域資源を活かし、多様な学びを提供しているふるさと創生大学が初めて企画したものです。ふるさと創生大学の受講生らが管理するふるさと農園や地域で獲れたサツマイモやブドウが並び、住田の皆さんは交流も楽しみながら新鮮な野菜を買い求めていました。

午後からは岩手銀河ネットが取り組むフィールドワークラーニングの一環で、住田町を訪れていた岩手県立大学の学生がえんがわ産直で販売する野菜を収穫しました。岩手銀河ネットでは地域が抱える課題に向けて主体的に動くことができる人材を育成し地域貢献につなげようと 2011 年から岩手フィールドワークラーニングを実施しています。今回のフィールドワークには岩手県立大学の学生 8 人が参加、2 日間の予定で住田の歴史と暮らしを学びました。また農業に理解を深めようといわれたこの体験で、地域の皆さんから教えてもらい泥だらけになりながらも一生懸命収穫していました。参加した学生は、「現地の人の話を聞くことで、大学では見付けられない地域社会をみることができた、また実家は農業をしているが手伝うことはしなかった。これからはやろうと思う」と話していました。

産直に出品するのは野菜類だけでなく、シノダケで編んだザル、カゴなど竹細工もあります。実はこの竹細工ができる人が少なくなりました。技能講習会などで教を乞うにも高齢で無理を言いにくく、技能の伝承が出来ていないので、この集落の竹細工文化が途切れてしまうことを心配しており、今の間に何とかしなければと思っています。

8. 米作り

最近米作りをする農家が少なくなり、荒れた田んぼや耕作放棄地が多くなりました。ふるさと創生大学のある土倉地区には 18 戸の農家がありますが、米作りするのは 4 戸だけです。この理由は農家の高齢化もありますが、米作りが経済的に割に合わないからです。

具体的に申しますと、米の 1 人当たりの年間消費量は、昭和 37 年度をピークに減少し、昭和 37 年度の米消費 118kg に対し、現在は半分程度の 60kg 以下にまで減少しています。

産直で 10 kg 3000 円で買えば一人 1 年分の米代は 1 万 8 千円ほどです。一方、田圃で米を作ると 10 アールあたり約 12 万円の経費が必要で、秋に米を 8 俵（1 俵 60kg）収穫し 1 俵 15,000 円で売ると、収入は 12 万円です。直接、産直で売れば、収支が同じになります。人件費は経費に含んでいませんので、含めれば完全に赤字です。農家が米作りを敬遠するのは当然のことです。

9. 昔からの経験と知恵・技の伝承

これから私達が為すべきことは、古老たちの経験と知恵を余すことなく吸収し、次の世代に繋ぐことだと思っています。集落は小さく、住民の人数も少なく、他の集落や住人との交流が少ない環境で、ほとんど自給自足の生活をしてきました。コロナ禍の状況下で振り返ってみると、これも生き方の一つであるように思います。

古老たちは昔からの経験と知恵を多く持ち、それを活かしてきました。先ほど紹介したメープルシロップは、水のない所で炭焼きする人の水分補給手段でしたし、ワラビの根や自然薯なども森の恵みとして大切にしてきました。私達も、このような自然を大切に、森や川など自然の恵みを上手に利用する知恵や技をできるだけ多く持ち、若い世代に伝えていかねばと思っています。

10. 環境教育

私が一関農業高校で教職に就いていたとき、畠山重篤さんと出会い、生徒に植樹をさせていただきました。これがきっかけになって、生徒たちは「環境」について真剣に考えるようになりました。

私と共に畜産の勉強に取り組んだ生徒のなかで、牧草地を覆うくらいに茂る「ギシギシ」のみを食草とする昆虫コガタルリハムシを利用して除草すること、及び個体数を増やす研究に取り組みました。当時「生物農薬」という言葉を聞くことはありませんでしたが、この研究報告は全国の最優秀賞を受賞しました。これが国会議員の目にとまり、学校を訪問されるなど注目を浴びました。TVのZOOM INでも紹介されました。



コガタルリハムシ成虫



同・幼虫

これを機会に環境への関心が校内に高まり、除草をコガタルリハムシではなく、ヤギ、ヒツジ、ウサギ、ニワトリなど家畜を利用する研究を始めました。ヒツジなど家畜に草を食べてもらう、これを「動物との共存」と名付け実験を続けました。この実験経緯を生徒の一人が作文に纏め、コンクールに応募したところ、内閣総理大臣賞を受賞しました。

畠山さんとの出会いで生徒たちに環境意識が芽生え、大きく育ったことをうれしく思っています。

ご清聴ありがとうございました。

【Q&A】

Q 1 : 東日本大震災のとき、ボランティアの学生 1 万 7 千人が住田町にきて、公民館や体育館に寝泊りしたとき、集落の人々是对応に大変苦労されたのではないのでしょうか。

A 1 : 一日の最大宿泊人数 300 名という日もあり、そのときは過密で大変でしたが毎日のことではなく、また、住民の皆さんに直接の影響はありませんでした。

Q 2 : 三陸海岸の諸都市は歴史的に地震、津波の被害に遭うことが比較的多く、その時に内陸部が後方支援をしてきた多くの経験が、今回の震災復興支援で多くの学生ボランティアを町に迎えたときの対応に役だったということがあるのでしょうか。

A 2 : 沿岸部で生活している家族や親せきは津波などの被害に遭えば世話をするのは当然のことです。

私達は今回のような大災害に遭遇した経験がなく、学生さんたちにどのように接触すればよいか、躊躇もしましたが、ボランティアの募集や現地での世話などを NPO 銀河ネットという団体が、地域とボランティアの学生の間での調整してくれました。このような両者の間に入る調整者が必要と思います。

(田中先生) : 後方支援のことですが、気仙川が森と海をつなぐ、具体的には現在であれば住田町と陸前高田、大船渡を繋ぐ。住田は内陸ですから農産物の産地で、一方、陸前高田や大船渡は海の町で魚介類が、それらが相互の生活を支え合う、こういう関係が長く続いてきたというのが後方支援の背景にあります。川が森と海をつないでいる、きわめて具体的な現れだと思うのですが、そのあたりはいかがでしょう。

(藤井先生) : 住田から港町まで行くのに昔は山の尾根を交通路として利用したのではないかとと思われるふしがあります。縄文時代の遺跡を調査すると海産物の遺物が非常に多く出土します。

Q 3 : この地域との交流を機会に移住した人がいますか。また大学生が地域と交流することに否定的であり、関わりたくないという住民の方がいますか。

A 3 : 社会人の移住は町も政策として進めているので実績はありますが、震災でボランティアにきた人は学

生ですので、その実績はありません。NPO 銀河ネットという組織の事務局担当者（大学生）が勉強のため短期間地域で生活したことはありましたが、移住には至っていません。

地域の人びとに受け入れに否定的なひとがいるかとのことですが、おそらく外部の人との接触に不慣れな人の中には敬遠するひとがいるかも知れません。

Q 4：生物農薬のお話しには興味を持ちました。その後の活用、進展はいかがでしょうか。

A 4：残念ながら活用や広がりはありません。問題はコガタリハムシは夏になると休眠し働かなくなる点です。個体数を増やす実験はしましたが休眠については対応できずそのままになっています。

Q 5：えんがわ産直についてご紹介いただきましたが、野菜そのものだけでなく漬物など 2 次加工品の販売もしていますか。

A 5：えんがわ産直は試行段階で、期間限定で行いました。加工品の商品化は今後の課題です。

Q 6：大学生との交流のとき、農業だけでなく林業、漁業の方たちとの交流があればよいと思うのですが。

A 6：漁業者との交流は、山田町にボランティア漁業体験を喜んで受け入れてくれる人がいて実現し、大学生たちに大変好評でした。林業については、住田町は 9 割以上が森林ですので、林業体験の希望があれば町は喜んで対応しますが、今回はボランティアの皆さんは震災復興目的で岩手に来ているので、海との係わりを優先した交流の場を設けることにし、林業者との交流は見合わせました。

【田中 克 先生】

藤井先生が遠野や住田の豊かな自然をいかに賢く持続的に活用して生きていくかという課題に、永年取り組んでこられた経緯を紹介頂きましたが、藤井先生はこの活動をするためにこの世に生を受けられたのではないかと思われる素敵なお話でした。気どることなくごく自然にいろいろなことに取組まれ、それぞれ工夫をこらし、地域の子どもから大人まで世代をこえて巻き込みながら実現に努力される姿に感動しております。住田には縄文人が暮らしていた遺跡があるとのことですが、私達は縄文人が住んでいた場所や環境、暮らしや生活の仕方を学び見習わないと、地球の維持ができず、私たちはこれからまともに生きていけるかどうか分からないところまで来ていることを思うにつけ、藤井先生が実践されていることは非常に大事なことだと感じました。埼玉県に北本市という人口 5 万人ほど縄文遺跡のある町があります。

ここでは、特に目立った地域資源はないけれど、周りには雑木林や谷津が当たり前に存在し、それらが普通に暮らしの中に溶け込める町づくりが進められています。

本講座でも大和田順子先生に SDGs について講演をしていただきました。SDGs はどちらかというと西歐的な考え方に基づいているのではないかと感じています。SDGs の 17 の目標達成を目指すことに異論はありませんが、これが日本に導入されなくても、住田や遠野には先人から受け継いできた知恵を生かそうとする意志と工夫があります。日本は日本らしいやり方を追求した方がよいのではないかと思います。

「森と海をつなぐ川」について申しますと、森と海には「間＝あいだ」があります。その空間に、見える存在として川があり、見えない存在として地下水系があります。今までは「あいだ」を無視し、すぐに得られる結果を求めすぎてきましたが、このことへの反省からいま「あいだ」を紡ぎ直すことが普遍的に求められています。それには「あいだ」を紡ぐ仕掛人が必要で、自然の成り行き任せでは紡げません。このことを自然なふるまいで行われているのが藤井先生であり、「あいだ」を紡ぎ直す人の育成を、ふるさと創生大学を拠点に進められていることがよく分かりました。

地球環境「自然学」講座と連携して講演会を継続聴講され、ふるさと学校運営の参考にさせていただければ幸いです。また、自然観察会で再度住田町訪問の計画がされることを願っています。 (了)